● 読書感想文コンクール 小学校 1・2・3 学年 の部●



関谷 百音(せきや ももね) 由井第一小 3年生

作品名:「いっぽんの鉛筆のむこうに」を読んで

図 書:いっぽんの鉛筆のむこうに

わたしは、鉛筆を大事に使ってニセンチメートルくらいまで小さくした鉛筆を宝物にしています。そして、よく、どうやって鉛筆ができているのかな、と考えていました。なので『いっぽんの鉛筆のむこうに』という題名を見たとき、「わぁー」と思い、読んでみたくなりました。

この『いっぽんの鉛筆のむこうに』という本はどうやって鉛筆が作られて、わたしたちの手元にとどいているのかが書かれています。まず、鉛筆のシンのなくてはならないざいりょうの黒鉛は、スリランカ、ボガラ鉱山地下三百メートルから、人の手によってほり出されています。次に、アメリカ合しゅう国シエラ・ネバタ山中で、インセンス・シダー(ヒノキの一しゅ)がきりたおされています。インセンス・シダーとは、鉛筆のシンのまわりに使われる木です。そして、きりたおされたインセンス・シダーは、かわをむかれ、せいざいされ、つみかさねて一年間かわかした後、長さ百八十五ミリメートルの〈スラット〉とよばれるいたにまで加工されます。このスラットは、メキシコのコンテナ船でアメリカ西海岸と日本の間を十二日間かけて運ばれます。スラットをつめこんだコンテナは巨大な運ばん車でトレーラーにつみこまれ、山形けん川西にある三びし鉛筆山形工場に運ばれます。この工場で、いよいよ鉛筆が作られていきます。そして、それぞれわたしたちの住んでいる近くのお店で鉛筆を買うことができます。

この本の中でわたしが一番おどろいたことは、スリランカのボガラ鉱山の地下三百メートルから黒鉛を人が手でくだいてとっている所です。そんな地下ふかい所から、しかも、手作業でとっていたなんて、鉛筆のシンのざいりょうをとることだけでも大へんなんだな、と思いました。

また、わたしはいつも、なんで鉛筆の一番後ろの所が半分でくっきり色が分かれているのかな、とふ思ぎに思っていました。本を読んでいると、二まいのスラットをはり合わせて作っているからだ、ということがわかって、「あぁー、そうだったの

かぁー」と、ぎ問がとけてよかったです。

わたしは、鉛筆を作るのに、せかいのいろいろな国からざいりょうが集められていることに、とてもおどろきました。また、せかいのいろいろな国の名前がでてきたり、その人たちの生活している様子を知り、どこの国でも家ぞくは、思いやって生活しているのだな、と思いました。そして、わたしたちがべん強するのにかかせない身近にある鉛筆は、おおぜいの人が力を合わせて、心をこめて作ってくれていることがわかり、今までい上に鉛筆を大事に使おうと、あらためて思いました。